

就労移行支援事業所で日本語検定を有効活用



就労移行支援事業所ナチュラ 取材記事

ライター 上村 雅代

就労移行支援事業所 natura（ナチュラ）は、特定非営利活動法人つぼみが運営する、一般就労をめざす障がい者のための自立支援施設です。高校を卒業してすぐの人から50代まで様々な年齢の男女が通所し、就労に必要な知識・能力を身につけています。

精神障がい、発達障がい、軽度知的障がいをお持ちの方が、最長2年の間に就労に向けた訓練、職場見学・実習、求職活動、トライアル雇用を経て就職します。ナチュラは就職後の定着支援を含め、働くことを希望する方へ、長期間の包括的な支援を行っています。

利用開始当初は週3日通所し、半年かけて週5日休まず通うことを目指します。2か月間休まず通所できて、初めて就職活動が始まるといいます。

「企業は朝から来られる人材を求めているから」

お話しいただいたのは、サービス管理責任者の皆川隆太さんです。

ナチュラでは学校・予備校のような時間割が月ごとに組みまれ、「ビジネスマナー、PC、ピッキング、封入受注作業」など、多種多様な講座から、利用者が自らの意思で参加します。

「どの講座も、中身はコミュニケーションなんです。これまで経験出来なかったことをここで経験し、本人が気付いていない特性に気付くことで自信をつける。『自信』と『コミュニケーション能力』を付けて就職していかれます」と皆川さん。

それらの講座の一つ、「マナー・常識」を指導している職業指導員の本島一昭さんも、コミュニケーション能力の必要性を感じている一人です。コミュニケーションを取るには、まず言葉だと、一昨年から「文章力」（4月より講座名が「マナー・常識」に変更）という講座を開設したといいます。

受講者に文章力を身につけさせたいと考えていた本島さんが出会ったのが、「日本語検定」でした。講座に「日本語検定」のテキストを使って「文章力」講座で指導して1年が経ち、2年目に差しかかる頃、「日本語検定団体特別試験」を導入。3か月に1度、これまでに4度、団体で受検されました。

「テキストが、まず敬語から始まるんです。この順番も良くて」と本島さん。社会で必要な敬語を意識させたいと、思いを語ります。

「会社で働いた経験のある人でも、しっかり研修がなされないまま働いていたという人も多いです。ここで改めて勉強できることは、社会に出た時に自信の裏付けになります」

熱心に取り組んでいる人は受検級が上がり、点数も上がっていくといいます。

「3か月に1度の受検を、みんな待ち遠しく思っています。15人までと決めています、毎回、ほぼ定員いっぱいです」

自分は何の分野は出来て、どこが弱いのか。フィードバックを元に、自分の日本語力はどの程度なのかを知る尺度として、検定を活かしてほしいと本島さんは考えます。

本島さんの講座を受けている方が採用面接を受けるとき、本島さんは検定の結果を持って行き、面接官に見せているといいます。「必ず良い印象になります。見せられる材料の一つになっています」と本島さん。実際、ナチュラの就職率はトップクラスです。

取材した日は「会社の1日」というプログラムで、施設内を会社に見立て、利用者は「ナチュラ社員」に扮していました。「総務部」と書かれた机に座る女性は、実際に電話を受け、「いつもお世話になっております。営業の〇〇でございますね…」と、すらすらとやり取りをしていました。

「会社の一日」の講座を見学して、会社とはコミュニケーションを取るのだと感じました。日本語力を身につけ、自分の使っている敬語に自信を持つことが、社会に出て働く自信に繋がるようです。

ナチュラの利用者の皆さんが良い就職先と出会うことを祈っています。



上村雅代（かみむら まさよ）プロフィール

ライター。1980年8月7日生まれ。芥川賞作家・荻野アンナ氏の助手として働きながら文章の研鑽を積む。『大震災 欲と仁義』荻野アンナとゲリラ隊（共同通信社）共著。現在、息子（4歳）の育児奮闘中。

芥川賞作家・荻野アンナさんの助手をつとめる傍ら、多くの作品をプロデュースし、最近では、人気アイドルグループNMB48のラジオ番組のシナリオを担当する等活躍中。